

中国演劇の成立と巫覡

福満, 正博

<https://hdl.handle.net/2324/7359933>

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (文学), 論文博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 福満正博

論 文 名 : 中国演劇の成立と巫覡

区 分 : 乙

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、中国元明時代の伝統演劇、いわゆる元曲および元雑劇と総称される文藝の成立と、その大きな形成要因の一つと考えられる巫覡が主催する儺戯という祭祀・儀礼との関係を考察したものである。本論は5つの章段によって構成される。

まず第一章「元雑劇中の神仙道化劇」では、中国の伝統演劇、およびそこから生み出された各種の短・長編の小説などに共通してうかがわれる強固な深層構造について、本論文に一貫する仮説が提出される。それは具体的には、強い呪術者、或いは英雄が登場し、数々の悪者を退治して物語が終わるのだが、一方、その退治する側の呪術者たちも、もともとは悪者と同質の人物であるという構造である。これは元明の戯曲を集めた『元曲選』や『六十種曲』の各作品群のみならず、明代の短編小説集『三言』、また明代の四大長編小説『三国志』、『水滸伝』、『西遊記』、『金瓶梅』などにも普遍的に見出すことができるが、さらにこの構造は、中国の各地方村落の風俗の中で行われてきた、季節祭の仮面劇「儺戯」にも、しばしば見て取ることはできる。元雑劇において度脱劇の代表作とされる「月明和尚」などは、民間の季節祭において儺戯と多くの共通項を持ち、これらの作品群が近世初期の白話文学の長編化にも大きな作用を与え、やがて明代以降の長編小説成立の起爆剤となったと、推論する。

第二章「元雑劇中の公案劇と『左伝』」では、中国の公案劇および小説の元型としての古代の巫覡の物語についての考察が展開される。この世の汚れをはらう宗教的主催者は、巫覡ともシャーマンとも呼ばれている。清末民国初の学者王国維は、その著「宋元戯曲考」の中で、演劇は巫覡に起源すると述べた。中国のシャーマニズムについては、この他にも20世紀初頭の文化人類学的視点からの高名な研究がすでいくつかあった。しかし本論においては、それらとは方法を異にし、さらに文献の精読に重点を置いて考察をすすめた。世界の諸文化研究において中国文化の優位なる点は、甲骨文や帛書竹簡また『易』や『周礼』など、古代の原初的で貴重な巫覡の記録をほぼ当時のままに読めることである。まず『周礼』には、巫覡の基本的な職務が『易』の占いにあることが示されている。そしてさらに『易』へと読み進んでゆくと、『易』は、内容が面白いばかりでなく、救済の書物であることが分かる。救済という意味では、後世の老荘思想、道教思想とも共通点が見出される。また巫覡の実像を探るために他書を渉猟してゆくと、『左伝』僖公十年の申生の話は、非常に興味深い物語と言える。それは、冤罪で自殺して不満を抱いた太子申生の亡霊が、巫覡である狐突の前に現れて不満を述べ、巫覡を通して復讐を予言する話である。古代中国の公案劇は、現代の推理小説とは異なり、事件の真相を捜査し推理してゆくのではなく、冤罪で不満を抱いて世を去った者が、巫覡を介してその不満を訴え、その問題を解決し、浄化・昇天してゆくものである。この構造は中国の古代演劇の重要な祖型といえる。

第三章「観阿弥の「自然居士」と関漢卿の「救風塵」」では、日本と中国の伝統演劇の比較対照が行われる。一般に中国の元雑劇の主な題材は、古代の散楽を源流とする世話物、つまり当時の現代劇であると考えられている。しかし、本研究の新たな主張として、元雑劇には散楽系統と、儺戯系統の二種類が存在するという事を述べる。しかし、後者の系統の存在は中国の劇本のみによる考証ではなかなか理解されないのが現状である。そこで、日本の能楽にもその類例があることを求めた考察が本章である。類例というのは、中国の神仙道化劇と、日本の能楽の複式夢幻能のことである。その前提として本章では、まず中国の元雑劇と、日本の能楽が同じ構造的・歴史的基盤に成立していることを論じる。そして、日本の能楽の創製者である観阿弥の「自然居士」

と、中国元雜劇の創製者関漢卿の「救風塵」の二作品を取り上げ、両者には巫覡の活躍という共通した主題があることを指摘している。

第四章「中国の地方劇「王魁」から見た南戯の始祖「王魁」は、明代において中国南方で演じられた南戯における巫覡劇についての考察である。徐渭『南詞序録』や葉子奇『草木子』などに、南戯は「王魁」「趙貞女」に始まったと記される。ともに男子負心の物語の先駆とされる。ところが、「趙貞女」は『琵琶記』として文人高明により大団円物語に改変されて南戯の代表作となり、古形を伺う資料は少ない。一方「王魁」も『焚香記』として改変されるが、古形の資料が比較的多く残っているので、それらを使って文人の手により改変される前の南戯の作品の古形を探ることができる。「王魁」の粗筋は、裏切られた妓女桂英が、自殺してその魂が呪術的飛翔を行い、やがて王魁を自殺に追い込むという物語である。劇本中に道士などが出現して呪術的空間がよく描かれている。

ところで中国には、地方戯というものが多くあり、古くからの劇本を踏襲して上演し続けている場合がある。特に福建省は、地理的不便さもあって、宋代以来の古い伝統文化をよく保存している例が多い。梨園戯は、泉州に残された古い劇種で知られている。本章では、その梨園戯の実演調査にもとづき、そこに宋代以来の筆記小説などの記述に一致する古い「王魁」物語が残存していることを指摘している。

第五章「中国演劇の最古の起源である目連戯」は、いよいよ目連戯についての考察である。北宋の『東京夢華録』巻八には、七月の中元節に七日間にわたって目連救母雑劇が上演されていたことが記録されている。これが中国における演劇上演の最古の記録である。なお筆者は中国の目連戯の上演を観劇した数少ない外国人と言えるが、さらに明代の目連救母劇を書いた鄭之珍の墓を、生地である安徽省の祁門県まで調査している。現在では安徽省と江西省とに分断されるが、明清時代の中国演劇を代表する流派である弋陽腔の発祥地江西省弋陽市と青陽腔の故郷である安徽省青陽県、儺戯で有名な安徽省池州市、鄭之珍が生まれた安徽省祁門県、目連救母劇を出版した安徽省石台县などは、すべて隣接し、それぞれの地域同士の交流もあることを実地踏査している。さらに筆者は、現在ではほぼ上演の機会も少なくなった目連戯を1990年代より何度か見る機会が幸いにしてあり、本論の分析は、それらを基礎として行われている。演劇、特に地方の村人たちによって伝承されるものは、劇本で読む場合と、実際の上演を観た場合とでは大きく異なる。筆者の見た実際の上演や、過去の上演記録を調査してゆくと、目連の母である青提を村中引き回して歩くのが特徴的である。三宝を犯した悪人である青提を引きずり回すというのは、地域の穢れを集めているのではなかろうか。儺戯儀礼においても、方相氏が市中を巡って、最後に穢れを船に集めて水に流す、送船儀礼を行う。目連戯では、穢れを集めて地獄に落ちた青提を、改めて救い出す後半の劇も続く。

最後に、筆者の「結論」では、目連はシャーマン・巫覡であり、目連戯は儺戯と同じく、一つの浄化儀礼と言える。神話的意味としては、母殺しと位置づけられよう。この後、元明時代となると、英雄が活躍する『西遊記』・『三国志』・『水滸伝』や、男女の離合・恋愛を描いた『西廂記』『琵琶記』『金瓶梅』などの白話文学の作品群が続々と登場してくる。その最初の物語として、北宋に成立していた目連戯を、母殺し神話として位置づけることは、中国の白話文学の歴史を整合的に説明するものとして重要な鍵となると考えられる。